

12. 修理

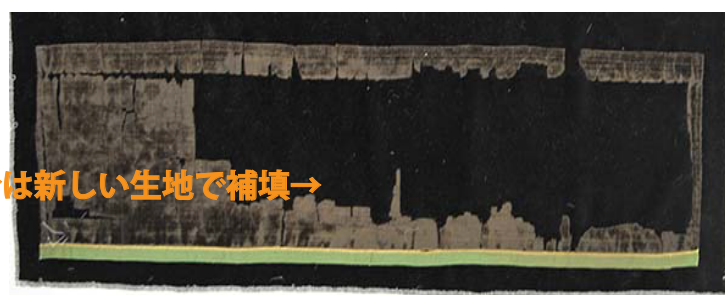
11-(2) で準備したものを 11-(3) で準備した台張りにのせ、経糸と並行に糸をわたし、緯糸に対して並行に留め付けました。留め付けは、裂の経糸と緯糸の隙間に針を通して、日本刺繍の技術を使って縫い留めていく、とても繊細な作業です。最後に台張りの羽二重の経糸と緯糸を引き抜いていくと、最終的に修理する裂に補填用の裂が縫い合わさった状態となります。

袴
(すそ部分)



←黒地ベルベットの補修箇所

欠損部分は新しい生地で補填→



袴
(刺繍部分)



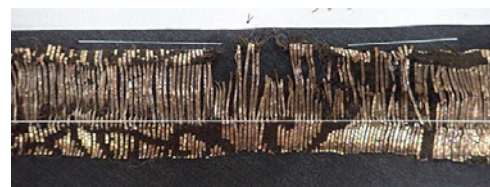
←平金糸の乱れ箇所

乱れを整え、補修用の糸を縦に渡して直した

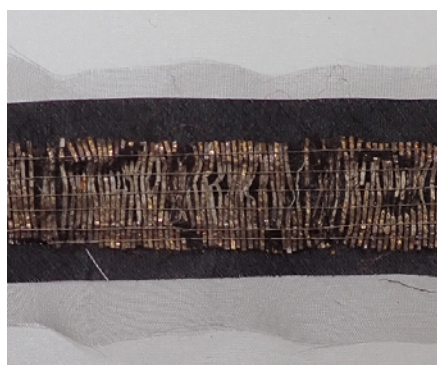


Before

金糸の刺繍部分は糸の乱れが激しいため、補填用裂の上に修理裂をのせてから、フノリで金糸を整えました。



After



さらに、金糸の脱落防止のため、修理裂の上に薄絹をかぶせました。

13. 仕立て

各修理裂の修理が終わった後、元の姿に仕立て直しました。縫うことで生地に新たな針目^{はりめ}ができないよう、元の針目をたどって縫い合わせました。



「八戸三社大祭の山車行事」山車人形衣裝修理事業

本報告では「衣装」の字を使用していますが、国庫補助事業では「衣裳」の字を使用しています。

「武田信玄」人形衣裳修理報告



重要無形民俗文化財「八戸三社大祭の山車行事」は、八戸市内のおがみ神社、長者山新羅神社、神明宮の合同例祭に合わせて、8月1日から3日に行われる行事で、三社の神幸行列に従い、多彩な民俗芸能と27台の華やかな風流山車が市内を巡行します。

このうち、おがみ神社の行列には、八戸市の有形民俗文化財である「武田信玄」と「太公望」の2体の山車人形が1年交代で曳き出されています。この2体の山車人形は、江戸時代後期頃のもので、かつては八戸藩の有力商人である河内屋が「武田信玄」を、八戸三店の1つ近江屋が「太公望」をそれぞれ所有していましたが、後の時代になり、おがみ神社へ2体とも寄進されました。

「八戸三社大祭の山車行事」の重要無形民俗文化財指定に向けた行事調査の中で、おがみ神社所蔵となっていた2体の山車人形についても調査が行われ、江戸時代の祭祀の姿や八戸藩の有力商人の祭りへのかかわりなどを示すものとして貴重であることから、平成15年7月29日に「武田信玄と屋台一式（人形、屋台、飾り幕）」「太公望と屋台一式（人形、屋台、飾り幕）」の2体が市指定文化財となりました。

この2体の山車人形の衣裳については、劣化が激しく、生地断裂も起こっている状況でした。染織分野の専門家による調査（平成28年度実施）の結果、これ以上の行事への曳き出しは、さらに衣裳を傷めてしまうことから、国宝重要文化財等保存・活用事業費補助金（文化庁）を活用し、「重要無形民俗文化財八戸三社大祭の山車行事

民俗文化財伝承・活用事業」として、行事の用具修理の観点から令和元年度より山車人形衣裳修理を行っています。

■事業概要

事業者：八戸三社大祭山車祭り行事保存会

事業期間：平成31年4月1日～令和3年11月30日

修理期間：令和元年7月11日

～令和2年3月10日【第Ⅰ期】

令和2年4月1日

～令和3年3月31日【第Ⅱ期】

令和3年4月1日～10月31日【第Ⅲ期】

修理対象：武田信玄人形衣裳一式

修理方針：文化財としての価値を保ちつつ、今後の行事への使用に耐えられるよう修理する。

修理担当：学校法人女子美術大学染織文化資源研究所

事業指導：文化庁、青森県教育委員会、八戸市教育委員会（社会教育課）

総事業費：6,400,588円

内訳）修理経費 6,324,408円

事務経費 76,180円

■今後の予定

修理完了した「武田信玄」人形衣裳は、人形に着せた状態で令和4年の八戸三社大祭へ曳き出し予定です。なお、今回修理した衣裳は行事へ曳き出す時のみ人形へ着せ、平時は中性紙箱^{ちゅうせいしばこ}に収納して空調管理のできる屋内で保管することとし、資料の保全をはかります。

また、令和4年度からは「太公望」人形衣裳修理に着手予定、事業期間は令和4年度から令和6年度となる見込みです。

本報告は「八戸三社大祭の山車行事人形衣裳修理業務報告書 武田信玄人形衣裳」女子美術大学染織文化資源研究所（令和3年10月）をもとに作成しました。

本件担当

八戸市教育委員会 社会教育課 文化財グループ

電話：0178-43-9465（直通）

メール：shakyo@city.hachinohe.lg.jp

■「武田信玄」人形衣裳修理の様子

1. 梱包・集荷



衣裳を1点ずつ密閉式の袋へ収納した後、美術専門車で女子美術大学（相模原市）へ運搬しました。袋の中には脱酸素材も入れて約1ヶ月間脱酸処理を行いました。



2. クリーニング



保護ネットの上からミュージウムクリーナーで虫の死がいやホコリなどの汚れを取り除きました。

3. 修理前撮影



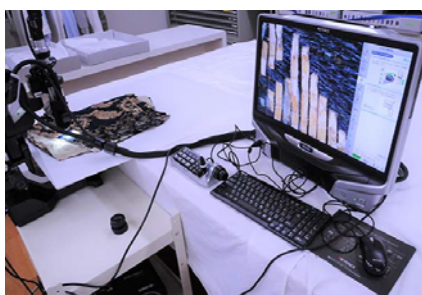
記録のため、修理前に撮影をしました。

4. 採寸



各衣裳の寸法や重さを計測しました。

5. 素材調査



修理に必要な材料の素材を準備するため、デジタルマイクロスコープやブラックライトを使用して衣裳の素材を調査しました。※右の写真では蛍光反応が見られ、天然染料の使用が分かりました。



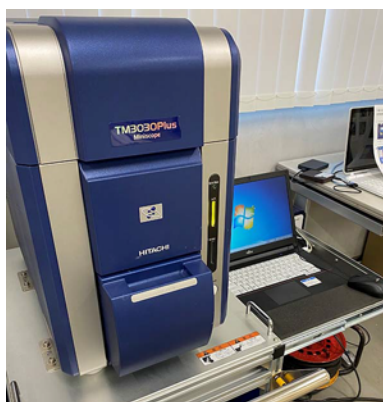
（腰巻のすそ部分）

7. 染料分析



繊維素材や染料の特定のため、2D放射輝度測定機を使って分析を行いました。これは、染料によって光の反射の特性が異なる点を利用して染料を推定する方法で、文化財における非破壊検査法のひとつとして近年需要が高まってきているものです。

6. 材料分析



衣裳の袖部分は、金糸を使用した金襴なのか、銀糸を使用した銀襴なのか判別が付きませんでした。

そこで、使用されている金属糸を特定するため、分析装置を使って詳しく調べました。その結果、Ag(銀)が検出され、「銀糸」であることが分かり、色に変色して黄色く見える部分はあるものの、銀襴であると断定されました。

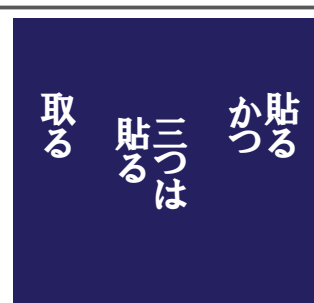
8. 解体 衣裳を裂（パーツ）ごとに解体したところ、以下の発見がありました。



袴を解体



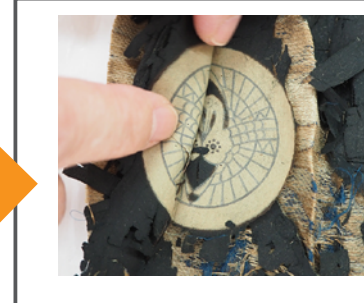
（1）仕立て職人の指示と見られる墨書（年代不明）



取る
貼る
三つは
かつ
貼る



袴の後ろひも部分を解体

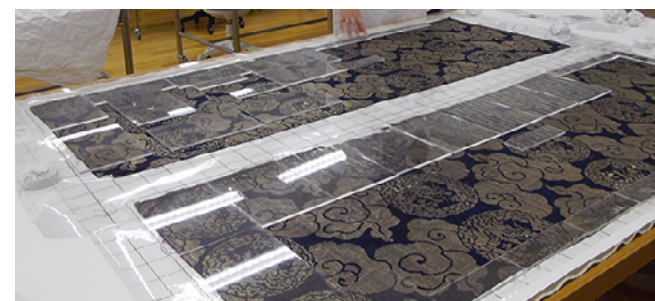


（2）八戸南部家の家紋（年代不明）

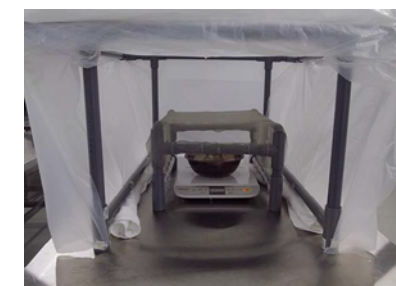
以前に使用されていたとみられる帯状の裂（帯芯）が発見されました。その帯芯には、八戸南部家の家紋の入った黒地の羽二重が使われており、もとは紋付の羽織や着物だったものを転用したと考えられます。

9. 解体したパーツごとの計測と生地両面の撮影、重量の計測

10. 加湿整形



経年劣化により衣裳生地の布目の経糸と緯糸のゆがみが生じていたため、グリッド線を記入した透明フィルムの上に置き、透湿防水効果フィルムをかぶせ、固くしぼったタオルを置いて加湿した後、アクリル板と重石を置いて形を整えました。



綿は経年劣化により固くなっていたため、加湿装置を作り、温度を上げた水蒸気を数回に分けて加え、ふくらみを復活させました。

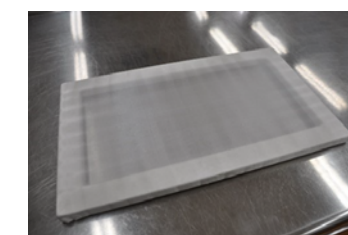
11. 修復準備



（1）補修用裂及び糸の準備
素材調査の結果をもとに、補修用裂、糸、仕立て用糸を準備しました。（染料分析結果を踏まえて染色）



（2）修理裂と補填裂の調整
補填用裂に修理裂をしつけ糸で固定し、経目と緯目を調整して合わせました。



（3）台張りの準備
修理の際に必要な薄絹の台張りを準備しました。

このように、見た目では判別できない素材を分析することで、制作当時の材質の特定や年代の推定ができます。

このほかに、袴のすそ部分の黒地ベルベットの裏打ちには、大福帳とみられる文書が使用されているなど、衣裳を解体しなければ分からない発見がありました。